

日英語の味覚形容詞：「アマイ」と“sweet”

皆 島 博

(2005年8月30日受付)

0.はじめに

本論では、日本語の味覚形容詞「アマイ」と英語の味覚形容詞“sweet”について、語彙分析の観点から対照言語学的な考察を行う。人間が五官(目・耳・舌・鼻・皮膚)を通じて感じることのできる、外界より受ける刺激のうち「視覚」「聴覚」「味覚」「嗅覚」「触覚」の五種の感覚を「五感」というが、これらの五感の中である感覚分野のことを表現するために他の感覚分野に含まれる語彙を比喩的に用いることを「共感覚的比喩(synaesthetic metaphor)」¹⁾という(国広 1989:28)。共感覚的比喩に基づく表現は、次の例のように、日本語と英語のような系統関係が異なる言語の間でも平行性を示すことがある²⁾。

- | | | | |
|-----|----|------------------|------------------|
| (1) | a. | 甘い香り／sweet odor | (「味覚」から「嗅覚」への転義) |
| | b. | 甘い音楽／sweet music | (「味覚」から「聴覚」への転義) |
| | c. | 甘いマスク／sweet face | (「味覚」から「視覚」への転義) |

このように基本的な共感覚的比喩としての用法においては、日英両言語は共通性を示すように思われる。したがって、本論では、日本語の「アマイ」と英語の“sweet”について、「味覚」から他の諸感覚への転義を中心に、両言語における味覚形容詞の意味のネットワークの展開および意味成分における共通点・相違点を対照言語学的見地から明らかにしていく。

1.日本語の「アマイ」と英語の“sweet”の本義としての「味覚」

「味覚」とは、舌にある味覚器官である味蕾を化学物質が刺激することによって生じる、「鹹」³⁾「酸」「甘」「苦」の四種の基礎感覚(味質)を含む、モノの味を認知する感覚のことである。本節では、この「味覚」の意味領域について、意味成分ごとに、日本語の「アマイ」と英語の“sweet”の「味覚」の意味のネットワークの展開について見ていく。

1.1 「味覚」のSUGARY/HONEYED

日本語の味覚形容詞「アマイ(甘い)」と英語味覚形容詞“sweet”は、「鹹」「酸」「甘」「苦」の四感覚の中の一つである「甘」を描写する最も基本的な形容詞である。まず、日本語の「アマイ」は、本義⁴⁾としては、食物に砂糖や蜜や飴などのような味が舌によって感知されている状態を描写する。すなわち、次の例における「アマイ」には、「砂糖の(ような)味がする」「蜂蜜の(ような)味がする」「砂糖の持つ味がする」「砂糖を入れた」といった概念が内包されている。

- (2) a. アマイ砂糖
b. 蜂蜜はアマイ

日本語の「アマイ」と同様に、英語の“sweet”も本義としては、食物に砂糖や蜜や飴などのような味が舌によって感知されている状態を描写する。すなわち、次の例における“sweet”のように、「砂糖の(ような)味がする」「蜂蜜の(ような)味がする」「砂糖の持つ味がする」「砂糖を入れた」といった概念を内包しているのは、日本語の「アマイ」とほぼ同じであるように思われる。

- (3) a. sweet cakes 「甘いケーキ」
b. be as sweet as honey 「蜂蜜のように甘い」

このように、日本語の「アマイ」と英語の“sweet”には、本義的には、HAVING A TASTE OF SUGAR/HONEYすなわちSUGARY/HONEYEDという共通の意味成分⁵⁾を仮定することができるであろう。

1.2 「味覚」のNOT DRY

日本語の「アマイ」は、ワインや日本酒などの酒類の糖度が高い状態を描写するのにも用いられる。すなわち、次の例における「アマイ」には、「甘口の」「甘みが強い」「辛くない」といった概念が内包されている。

- (4) a. アマイ日本酒
b. このワインはアマイ

英語の“sweet”にも、日本語の「アマイ」と同様に、ワインなどの酒類の糖度が低い、という概念が内包されており、次の例のように、日本語の「アマイ」とほぼ平行した用法があるように思われる。

- (5) a. sweet wine 「甘口のワイン」
- b. sweet sherry 「甘口のシェリー酒」

したがって、日本語の「アマイ」と英語の“sweet”には、NOT DRYという共通の意味成分を仮定することができるであろう。

1.3 「味覚」のNOT SOUR

日本語の「アマイ」は、果実・果物などの酸度・酸味について、それが比較的高くない状態(あるいは、比較的低い状態)を描写するのにも用いられることがある。すなわち、次の例における「アマイ」には、「酸味が穏やかな」「あまり酸っぱくない」といった概念が内包されている。

- (6) a. アマイ蜜柑
- b. スターキングはアマイ

英語の“sweet”にも、日本語の「アマイ」と同様に、果実・果物などの酸度・酸味について、それが比較的高くない(あるいは、比較的低い)、という概念が内包されており、次の例のように、日本語の「アマイ」とほぼ平行した用法があるように思われる。

- (7) a. sweet apples 「甘いリンゴ」
- b. The pineapple is sweet. 「そのパイナップルは甘い」

したがって、日本語の「アマイ」と英語の“sweet”には、NOT SOURという共通の意味成分を仮定することができるであろう。

1.4 「味覚」のNOT SALTY

日本語の「アマイ」は、調味料・煮物・汁物などの食物や料理などの塩分・塩気が比較的多くない(あるいは比較的小さい)状態を描写するのにも用いられる。言い換えれば、本来、塩味が期待される食物や料理に対して、その塩加減が十分に達していない、物足りない、刺激的でない、といったニュアンスを含む語彙である。すなわち、次の例における「アマイ」には、「塩気が薄い」「塩気が少ない」「塩気が足りない」「塩分が足りない」「塩辛い」といった概念が内包されている。

- (8) a. アマイ塩加減の煮物
- b. 今日の味噌汁はアマイ

英語の“sweet”にも、日本語の「アマイ」と同様に、食物などの塩分濃度について、それが比較的高くない(あるいは、比較的低い)、という概念が内包されており、次の例のように、日本語の「アマイ」とほぼ平行した用法があるように思われる。

- (9) a. a sweet spring 「無塩泉(塩分のない, 汚染されてない)」
b. sweet butter 「無塩バター」

したがって、日本語の「アマイ」と英語の“sweet”には、NOT SALTYという共通の意味成分を仮定することができるであろう。

1.5 「味覚」のNOT PUNGENT

日本語の「アマイ」は、食物や料理などの香辛料による刺激成分・刺激度が比較的高くない(あるいは比較的低い)状態を描写するのにも用いられる。すなわち、次の例における「アマイ」には、「味があまり刺激的でない」「あまりピリッとした味がしない」「穏やかに味付けされた」といった概念が内包されている。

- (10) a. アマイ(甘口の)カレー
b. このカレー粉はアマク調合されている

英語の“sweet”にも、日本語の「アマイ」と同様に、食物や料理などの刺激成分・刺激度がについて、それが比較的高くない(あるいは、比較的低い)、という概念が内包されており、次の例のように、日本語の「アマイ」とほぼ平行した用法があるように思われる。

- (11) a. sweet pickles 「ピリピリしないピクルス」
b. sweet curry powder 「甘口のカレー粉」

したがって、日本語の「アマイ」と英語の“sweet”には、NOT PUNGENTという共通の意味成分を仮定することができるであろう。

1.6 「味覚」のDELICIOUS

「甘い味」は「旨い味」とも感じられることから、「美味」の意味⁹⁾においても用いられることがある。日本語の「アマイ」は、食物や料理などの味が好ましい状態にあることを描写するのにも用いられる。すなわち、次の例における「アマイ」には、「美味な」「味のよい」「うまい」「おいしい」といった概念が内包されている。

- (12) a. アマイ岩清水
b. 新鮮なアマイ鮑の刺身

英語の“sweet”にも、日本語の「アマイ」と同様に、食物や料理などが「美味」であるという概念が内包されており、次の例のように、日本語の「アマイ」とほぼ平行した用法があるように思われる。

- (13) a. sweet dishes 「おいしい料理」
b. The nearer the bone, the sweeter the meat. 「骨に近いところほど肉はうまい」

したがって、日本語の「アマイ」と英語の“sweet”には、DELICIOUS⁷⁾という共通の意味成分を仮定することができるであろう。

1.7 「味覚」のNOT FERMENTED

日本語の「アマイ」は、食物や飲料などの味・香りなどについて、それが変化していない、健全な状態を保っている、といった状態を描写するのに用いられることがある。すなわち、次の例における「アマイ」には、「発酵していない」「腐っていない」「酸っぱくない」といった概念が内包されている。

- (14) a. アマイ低温殺菌牛乳
b. そのフレッシュジュースはアマイ

英語の“sweet”にも、日本語の「アマイ」と同様に、食物や飲料などの味・香りなどが「正常に保たれている」という概念が内包されており、次の例のように、日本語の「アマイ」とほぼ平行した用法があるように思われる。

- (15) a. sweet cider 「未発酵のリンゴジュース」
b. The milk is still sweet. 「そのミルクは(新鮮で)まだ味が変わっていない」

したがって、日本語の「アマイ」と英語の“sweet”には、NOT FERMENTEDという共通の意味成分を仮定することができるであろう。

2. 「嗅覚」への転義

「嗅覚」とは、揮発性物質が嗅覚器の感覚細胞を化学的に刺激することによって生じる、においを

感じる感覚のことである。本節では、この「嗅覚」の意味領域について、意味成分ごとに、日本語の「アマイ」と英語の“sweet”の「味覚」から「嗅覚」への意味のネットワークの展開について見ていく。

2.1 「嗅覚」のFRAGRANT

砂糖・蜜・飴などのような舌に快い感覚は、「味覚」以外の感覚にも転用されることがあるが、その中の一つが「嗅覚」である。「アマイ」という味覚は、多くの人間に快く感じられる感覚であるので、においが芳醇で快い状態・様子を表すために「嗅覚」とも自然に結びつく。すなわち、次の例における日本語の「アマイ」には、「香りがよい」「快い香りがする」「芳香を放つ」「心地よいにおいがする」といった概念が内包されている。

- (16) a. アマイ金木犀の香り
b. バラのアマイ香りが漂う公園

英語の“sweet”にも、日本語の「アマイ」と同様に、モノの香り・匂いなどが「よい」「快い」「心地よい」という概念が内包されており、次の例のように、日本語の「アマイ」とほぼ平行した用法があるように思われる。

- (17) a. sweet flowers 「よくにおう花」
b. The roses smell sweet. 「そのバラは甘い香りがする」

したがって、日本語の「アマイ」と英語の“sweet”には、FRAGRANTという共通の意味成分を仮定することができるであろう。

2.2 「嗅覚」のNOT POISONOUS

上の2.1節において日本語の「アマイ」と英語の“sweet”にFRAGRANTという共通の意味成分を仮定したが、気体・ガスなどについて、次の例のように「毒素がない」「有害な臭いがない」「有毒な臭い成分がない」といった概念への転義が見られることがある。

- (18) a. sweet mine air 「無害な(臭いのない)鉱山の空気」
b. the sweet air of the countryside「嫌な臭いのない(汚染されてない)田舎の空気」

日本語の「アマイ」の場合、「アマイ 鉱山の空気」「その鉱山の空気はアマイ」などという表現は一般的ではない。したがって、NOT POISONOUSという意味成分に関しては、英語の

“sweet”にのみ仮定しておくことが妥当であろう。

3. 「聴覚」への転義

「聴覚」とは、耳が音波の刺激を受けて鼓膜を振動させることによって生じる、音を感じる感覚のことである。本節では、この「聴覚」の意味領域について、意味成分ごとに、日本語の「アマイ」と英語の“sweet”の「味覚」から「聴覚」への意味のネットワークの展開について見ていく。

3.1 「聴覚」のMELODIOUS

「味覚」に対して快い刺激は「聴覚」に対しても転用されることがある。日本語の「アマイ」は、人やモノの音や声 that 快く感じられる、美しく響く、といった状態を描写するのに用いられることもある。すなわち、次の例における「アマイ」には、「耳に心地よい」「人の声が美しい」「音が心地よい」「音楽が美しく響く」といった概念が内包されている。

- (19) a. アマイ声
b. アマイ旋律(メロディー)

英語の“sweet”も、日本語の「アマイ」と同様に、「耳に心地よい」「音が心地よく感じられる」「人の声が美しく感じられる」という概念が内包されており、次の例のように、日本語の「アマイ」とほぼ平行した用法があるように思われる。

- (20) a. sweet music 「甘美な音楽」
b. a sweet singer 「声の美しい歌手」

したがって、日本語の「アマイ」と英語の“sweet”には、MELODIOUSという共通の意味成分を仮定することができるであろう。

3.2 「聴覚」のFALSE

聴覚的に「心地よい」という概念は、「人の心を引き付けて迷わせるようだ」ひいては「言葉巧みな」という概念と結び付けられることもある。すなわち、次の例における「アマイ」には、「不正直な」「不誠実な」「インチキな」「詐欺まがいの」といった概念が内包されている。

- (21) a. 気をつけよう。暗い夜道とアマイ声(標語)
b. 悪徳リフォーム業者がアマイ言葉で一人暮らしの老人をだました

英語の“sweet”の場合は、下の3.3節で見るが、どちらかと言えば、「媚び」「へつらい」などという概念と結びつけられやすいように思われる。したがって、FALSEという意味成分に関しては、日本語の「アマイ」にのみ仮定しておくことが妥当であろう。

3.3 「聴覚」のFLATTERING

日本語の「アマイ」の場合は、上の3.2節で見たように、言葉の響きや話し方は誠実そうであっても言葉の裏には不誠実な下心がある、という含意がある。英語の“sweet”の場合は、次の例のように、どちらかと言えば、「人をおだてる」「お世辞を言う」「媚びへつらう」「本物よりよく見せようとする」といった意味において用いられるようである。

- (22) a. sweet talk 「お世辞, おべっか」
 b. John tried to sweet-talk the boss into giving him a raise. 「ジョンは上司に取り入って給料を上げてもらおうとした」

したがって、FLATTERINGという意味成分に関しては、英語の“sweet”にのみ仮定しておくことが妥当であろう。

4. 「視覚」への転義

「視覚」とは、光のエネルギーが網膜の感覚細胞を刺激することによって生じる、明暗・色・形態・運動などを感じる感覚のことである。本節では、この「視覚」の意味領域について、意味成分ごとに、日本語の「アマイ」と英語の“sweet”の「味覚」から「視覚」への意味のネットワークの展開について見ていく。

4.1 「視覚」のPRETTY

「味覚」に対して快い刺激は「視覚」に対しても転用されることがある。日本語の「アマイ」は、「視覚」に関して「心地よい感触」、言い換えれば、外見・見た目・見た感じが「よい」ということを描写するのにも用いられることがある。すなわち、次の例における「アマイ」には、外見的な側面について「素敵な」「綺麗な」「可愛い」「可愛らしい」といった概念が内包されている。

- (23) a. 韓流スターのアマイマスク
 b. ジャニーズ系のアマイフェイス

英語の“sweet”も、日本語の「アマイ」と同様に、外見的な側面について「よい」という概念が内包されており、次の例のように、日本語の「アマイ」とほぼ平行した用法があるように思われる。

- (24) a. a sweet baby 「可愛い赤ちゃん」
b. a sweet young thing 「可愛らしい娘」

したがって、日本語の「アマイ」と英語の“sweet”には、PRETTYという共通の意味成分を仮定することができるであろう。

4.2 「視覚」のSOFT

上の4.1節で見た外見的な「甘さ」は、色やモノの線やシルエットの「やわらかさ」に結び付けられることがある。英語の“sweet”の場合は、次の例のように、「線が滑らかな」「線が太くない」「色が柔らかな」「色がざらざらしない」といった意味において用いられることがある。

- (25) a. a sweet color 「柔らかな色」
b. the sweet lines of her arms 「彼女の腕のやわらかな線」

日本語の「アマイ」の場合は、上の英語の例を直訳した「? 甘い色」「彼女の腕の? 甘い線」という表現から英語の表現と同様のニュアンスは表しがたいと思われる。したがって、SOFTという意味成分に関しては、英語の“sweet”にのみ仮定しておくことが妥当であろう。

5. 「触覚」への転義

「触覚」とは、物に触れた時に生じる、皮膚の触点及び各種受容器により感受される皮膚感覚のことである。本節では、この「触覚」の意味領域について、意味成分ごとに、日本語の「アマイ」と英語の“sweet”の「味覚」から「触覚」への意味のネットワークの展開について見ていく⁸⁾。

5.1 「触覚」のNOT PAINFUL

「味覚」に対して快い刺激は「触覚」に対しても転用されることがある。日本語の「アマイ」は、肉体的な痛み・苦痛が比較的強くない(あるいは比較的弱い)といった状態を描写するのに用いられることがある。すなわち、次の例における「アマイ」には、特に身体的な痛みについて「軽い」「弱い」「強くない」「穏やかである」といった概念が内包されている。

- (26) a. アマイ痛み
b. 子犬のアマ噛み

英語の“sweet”も、日本語の「アマイ」と同様に、痛み・苦痛が比較的穏やかである、という概念を、次の例のように、特に比喩的な表現において、表すように思われる。

- (27) a. sweet pain 「さほどひどくない痛み」
 b. sweet ache 「さほどひどくない痛み」

したがって、日本語の「アマイ」と英語の“sweet”には、NOT PAINFULという共通の意味成分を仮定することができるであろう。

5.2 「触覚」のNOT TIGHT

日本語の「アマイ」は、本来ならば、きちんと固く締められているべきモノの物理的な触覚について、感知的に堅牢でない・確実ではない、といった状況を描写するのにも用いられることがある。すなわち、次の例における「アマイ」には、「ゆるい」「ゆるんでいる」「ぶかぶかだ」「しっかりとしていない」といった概念が内包されている。

- (28) a. タイヤの空気がアマイ(タイヤに触れた感触がぶかぶかだ)
 b. 自転車のブレーキがアマイ(ブレーキレバーの感触がゆるい)

英語の“sweet”については、上の日本語の例に見られるような含意はないように思われる。したがって、NOT TIGHTという意味成分に関しては、日本語の「アマイ」にのみ仮定しておくことが妥当であろう。

5.3 「触覚」のSMOOTH

日本語の「アマイ」は、モノに手で触ったり、触れたときの物理的な触覚について、感触が快い・さわり心地がよい、といった状況を描写するのにも用いられることがある。すなわち、次の例における「アマイ」には、「なめらかな」「やわらかい」「サラサラしている」「すべすべしている」「ザラザラしていない」といった概念が内包されている。

- (29) a. アマイ感触
 b. アマイ手触り

英語の“sweet”については、上の5.2節と同様に、上の日本語の例に見られるような含意はないように思われる⁹⁾。したがって、SMOOTHという意味成分に関しては、日本語の「アマイ」にのみ仮定しておくことが妥当であろう。

6. 「五感以外」への転義

上の1～5節では、日本語の「アマイ」と英語の“sweet”の「味覚」から「嗅覚」「聴覚」「視覚」「触

覚」への意味のネットワークの展開について見たが、本節では、「五感以外」への意味のネットワークの展開について、意味成分ごとに見ていく。

6.1 「五感以外」のBE-IN-LOVE-WITH

日本語の「アマイ」は、特に男女間の恋愛に関する事柄について、心地よい雰囲気である、快い気持ちになることができる、といった状況を描写するのに用いられることがある。すなわち、次の例における「アマイ」には、「愛情あふれる」「愛が込められた」「幸福感に浸ることのできる」といった概念が内包されている。

- (30) a. アマイ愛の囁き¹⁰⁾
b. 初恋のアマイ雰囲気に酔いしれる

英語の“sweet”も、日本語の「アマイ」と同様に、「(人に)惚れて」「(人が)好きで」「大いに愛された」「最愛の」といった概念を、次の例のように、(特に話し言葉において)表すように思われる。

- (31) a. He's sweet on her. 「彼は彼女に夢中だ」¹¹⁾
b. She is still sweet on him after all this time. 「彼女は今でも彼のことが好きだ」

したがって、日本語の「アマイ」と英語の“sweet”には、BE-IN-LOVE-WITHという共通の意味成分を仮定することができるであろう。

6.2 「五感以外」のLENIENT

「五感以外」の「アマイ」と“sweet”の意味成分について、日英両語で共通しているのは、上の6.1節のBE-IN-LOVE-WITHくらいしかないように思われるので、これ以降の6.2～6.9節では、日本語のみに仮定できる意味成分を見ていくことにする。

日本語の「アマイ」は、英語の“sweet”とは異なり、人の性質・性格について、物事に対する態度・姿勢に厳格さや正確さが足りない状態を描写するのに用いられる。すなわち、次の例における「アマイ」には、「寛大な」「厳しくない」「やさしい」「だらしない」「生ぬるい」「至らない点を見逃してくれる」といった概念が内包されている。

- (32) a. 生徒にアマイ先生
b. 彼は他人に厳しく、自分にアマイ

したがって、この場合の日本語の「アマイ」には、LENIENTという意味成分を仮定することが

できるであろう。

6.3 「五感以外」のTHOUGHTLESS

日本語の「アマイ」は、英語の“sweet”とは異なり、人の考え方・判断などについて、それが不完全で不徹底な状態を描写するのにも用いられる。すなわち、次の例における「アマイ」には、「厳密でない」「思慮に欠ける」「判断力のない」といった概念が内包されている。

- (33) a. アマイ 考え
b. 首相の状況判断はアマカッタ

したがって、この場合の日本語の「アマイ」には、THOUGHTLESSという意味成分を仮定することができるであろう。

6.4 「五感以外」のVULNERABLE

日本語の「アマイ」は、英語の“sweet”とは異なり、人の行為、特に防御や攻撃について、守りや攻めが不十分で不徹底な状態を描写するのにも用いられる。すなわち、次の例における「アマイ」には、「手ぬるい」「隙がある」「緊張感に欠ける」といった概念が内包されている。

- (34) a. 脇(わき)がアマイ
b. ディフェンスがアマイ

したがって、この場合の日本語の「アマイ」には、VULNERABLEという意味成分を仮定することができるであろう。

6.5 「五感以外」のUNDERESTIMATED

日本語の「アマイ」は、英語の“sweet”とは異なり、人に対して、相手を見下したり、過小評価するといった状態を描写するのにも用いられる。すなわち、次の例における「アマイ」には、「舐めた」「侮った」「軽視した」「馬鹿にした」「軽く見た」といった概念が内包されている。

- (35) a. 素人だからと言ってアマク見てはならない
b. 世の中は君が考えるほどそんなにアマクない

したがって、この場合の日本語の「アマイ」には、UNDERESTIMATEDという意味成分を仮定することができるであろう。

6.6「五感以外」のNOT SECURED

日本語の「アマイ」は、英語の“sweet”とは異なり、物事の状況・様子・程度について、満足すべきではない状態・不十分な状態・不完全な状態を描写するのにも用いられる。すなわち、次の例における「アマイ」には、「ゆるい」「ゆるんだ」「締りが悪い」といった概念が内包されている。

- (36) a. ネジがアマくなっていた(締め方が不十分な)
b. この写真はピントがアマイ(調整が不十分な)

したがって、この場合の日本語の「アマイ」には、NOT SECUREDという意味成分を仮定することができるであろう。

6.7「五感以外」のSIMPLE

日本語の「アマイ」は、英語の“sweet”とは異なり、物事の本質や問題について、成り立ちや構造を理解するのが比較的困難ではないという状態を描写するのにも用いられる。すなわち、次の例における「アマイ」には、「単純な」「簡単な」「容易な」といった概念が内包されている。

- (37) a. 話し合いで解決するほどその問題はアマくない
b. 常識的に考えて個人でどうこうできるというアマイ問題ではない

したがって、この場合の日本語の「アマイ」には、SIMPLEという意味成分を仮定することができるであろう。

6.8「五感以外」のDULL

日本語の「アマイ」は、英語の“sweet”とは異なり、特に刃物類について、よく切れない、刃が鋭くない、といった状態を描写するのにも用いられる。すなわち、次の例における「アマイ」には、「鈍い」「鋭利でない」「鋭くない」「なまぐらの」といった概念が内包されている。

- (38) a. この包丁は刃がアマイ
b. この包丁は切れ味がアマイ

したがって、この場合の日本語の「アマイ」には、DULLという意味成分を仮定することができるであろう。

6.9 「五感以外」のSLUGGISH

上の6.8節における日本語の「アマイ」のDULLという意味成分は、株価の動きについて、「鈍く」低落気味である、という状況と比喩的に結び付けられることができる。すなわち、次の例における「アマイ」には、「株価などがやや安い」「相場がいくらか下がり気味だ」といった概念が内包されている。

- (39) a. アマイ相場
b. 相場がアマイ

したがって、この場合の日本語の「アマイ」には、株式用語としてのやや特殊な用法ではあるが、SLUGGISHという意味成分を仮定することができるであろう。

6.10 「五感以外」のDELIGHTFUL

上の6.2～6.9節では、日本語のみに仮定できる意味成分について見てきたが、逆に、これ以降の6.10～6.14節では、英語のみについて仮定できる意味成分について見ていくことにする。

英語の“sweet”は、日本語の「アマイ」とは異なり、人の気分について、大きな喜び・快感を与えている、という状態を描写するのにも用いられる。すなわち、次の例における“sweet”には、「快い」「楽しい」「愉快的」「気持ちよい」といった概念が内包されている。

- (40) a. sweet toil 「好きでやっている(楽しい)仕事」
b. a sweet sleep 「気持ちよい(快い)眠り」

したがって、この場合の英語の“sweet”には、DELIGHTFULという意味成分を仮定することができるであろう。

6.11 「五感以外」のKIND

英語の“sweet”は、日本語の「アマイ」とは異なり、人の性質や性格について、円満であるとか、穏やかであるといった状態を描写するのにも用いられる。すなわち、次の例における“sweet”には、「優しい」「親切な」「丁寧な」といった概念が内包されている。

- (41) a. a sweet temper 「優しい気質, 気だてのよさ」 cf. *sweet-tempered, sweet-natured*
b. She was very sweet to me. 「彼女は私にとっても親切にしてくれた」

したがって、この場合の英語の“sweet”には、KINDという意味成分を仮定することができ

るであろう。

6.12 「五感以外」のENJOYABLE

英語の“sweet”は、日本語の「アマイ」とは異なり、ものごとや場所などの雰囲気について、人に快い気分や快感を与えてくれる、という状態を描写するのにも用いられる。すなわち、次の例における“sweet”には、「快くさせてくれる」「愉快にさせてくれる」「楽しくさせてくれる」「心地よくさせてくれる」といった概念が内包されている。

- (42) a. a sweet home 「居心地のよい家庭」
b. sweet praises 「気持ちがよくなるような褒め言葉」

したがって、この場合の英語の“sweet”には、ENJOYABLE¹²⁾という意味成分を仮定することができるであろう。

6.13 「五感以外」のSMOOTH-RUNNING

英語の“sweet”は、日本語の「アマイ」とは異なり、機械や乗り物などについて、人が使用するのがやさしい、動かしやすい、制御しやすい、といった状態を描写するのにも用いられる。すなわち、次の例における“sweet”には、「滑らかに動く」「操作が容易な」「動かしやすい」「操縦するのがやさしい」といった概念が内包されている。

- (43) a. a sweet ship 「操舵しやすい船」
b. This clutch is real sweet when you step on it. 「このクラッチは実に操作しやすい」

したがって、この場合の英語の“sweet”には、SMOOTH-RUNNINGという意味成分を仮定することができるであろう。

6.14 「五感以外」のSKILLED

英語の“sweet”は、日本語の「アマイ」とは異なり、人の技術や技能について、巧みである、優れている、秀でている、といった状態を描写するのにも用いられる。すなわち、次の例における“sweet”には、「上手な」「見事な」「腕のいい」といった概念が内包されている。

- (44) a. a sweet pilot 「熟練したパイロット」
b. He was a sweet hand at weeding. 「彼は草刈りがうまい」

したがって、この場合の英語の“sweet”には、SKILLEDという意味成分を仮定することができるであろう。

7.まとめ

本論では、日本語の味覚形容詞「アマイ」と英語の味覚形容詞“sweet”について、Ⅰ.「味覚」、Ⅱ.「嗅覚」、Ⅲ.「聴覚」、Ⅳ.「視覚」、Ⅴ.「触覚」、Ⅵ.「五感以外」の六つの意味領域にわたり、辞書などに挙げられている用例をもとに意味分析を仮定した。以下、整理して表にして示す。

意 味 領 域	意 味 成 分	日 本 語	英 語
Ⅰ.「味覚」	SUGARY/HONEYED	○	○
	NOT DRY	○	○
	NOT SOUR	○	○
	NOT SALTY ¹³⁾	△	○
	NOT PUNGENT	○	○
	DELICIOUS	○	○
	NOT FERMENTED	○	○
Ⅱ.「嗅覚」	FRAGRANT	○	○
	NOT POISONOUS	×	○
Ⅲ.「聴覚」	MELODIOUS	○	○
	FALSE	○	×
	FLATTERING	×	○
Ⅳ.「視覚」	PRETTY	○	○
	SOFT	×	○
Ⅴ.「触覚」	NOT PAINFUL	○	○
	NOT TIGHT	○	×
	SMOOTH	○	×
Ⅵ.「五感以外」	BE-IN-LOVE-WITH	○	○
	LENIENT	○	×
	THOUGHTLESS	○	×
	VULNERABLE	○	×
	UNDERESTIMATED	○	×
	NOT SECURED	○	×
	SIMPLE	○	×
	DULL	○	×
	SLUGGISH	○	×
	DELIGHTFUL	×	○
	KIND	×	○
	ENJOYABLE	×	○
	SMOOTH-RUNNING	×	○
	SKILLED	×	○

ここで、意味領域と意味成分ごとに、日本語の「アマイ」と英語の“sweet”の共通点と相違点について簡単に整理しておく。まず、Ⅰ.「味覚」の意味領域については、本論で仮定したSUGARY/HONEYED, NOT DRY, NOT SOUR, NOT SALTY, NOT PUNGENT, DELICIOUS, NOT FERMENTEDという共通の意味成分が日英両言語に見られた。次に、Ⅱ.「嗅覚」の意味領域については、FRAGRANTという共通の意味成分が日英両言語に見られたが、NOT POISONOUSという意味成分については英語にのみ見られた。Ⅲ.「聴覚」の意味領域については、MELODIOUSという共通の意味成分が日英両言語に見られたが、FALSEという意味成分については日本語のみ、FLATTERINGという意味成分については英語にのみ見られた。Ⅳ.「視覚」の意味領域については、PRETTYという共通の意味成分が日英両言語に見られたが、SOFTという意味成分については英語にのみ見られた。Ⅴ.「触覚」の意味領域については、NOT PAINFULという共通の意味成分が日英両言語に見られたが、NOT TIGHT, SMOOTHという意味成分については日本語にのみ見られた。最後に、Ⅵ.「五感以外」の意味領域については、BE-IN-LOVE-WITHという共通の意味成分が日英両言語に見られた以外は、日英語において意味成分の分布に対照的な傾向性が見られた。すなわち、LENIENT, THOUGHTLESS, VULNERABLE, UNDERESTIMATED, NOT SECURED, SIMPLE, DULL, SLUGGISHという意味成分については日本語にのみ見られたのに対し、DELIGHTFUL, KIND, ENJOYABLE, SMOOTH-RUNNING, SKILLEDという意味成分については英語にしか見られなかった。

このように、「五感以外」の意味領域においては、各意味成分について、日本語の「アマイ」と英語の“sweet”とでは対照的な分布が見られるのである。すなわち、どちらかと言えば、ポジティブな意味については英語の“sweet”に、反対に、ネガティブな意味については日本語の「アマイ」に集中している、ということが上の表から読み取ることができる。日本語の「アマイ」と英語の“sweet”は、両者とも基本的な意味においては人間の「味覚」にとって「好ましい状態」を描写する形容詞であるが、意味の転義の方向性において、日本語は「好ましくない状態」¹⁴⁾へとベクトルが向かうことがある、という点で英語とは大きく異なるように思われるが、この点についてはさらなる検討が必要であろう。

【後註】

- 1) Trask (1997:214)によれば, synaesthetic metaphorは, synaesthesiaともいい, 次のように定義される: The ability to perceive one kind of sensory stimulus as though it were another kind. A synaesthetic may report, for example, that white paint smells blue, that grass smells purple, that a hovering helicopter sounds green, that lemons taste pointy while chocolate tastes prickly, that the vowel [u] sounds yellow. Most notably, a synaesthetic sees speech in colour: individual sounds, individual words, individual names all have particular colours. The condition affects about one person in 25,000.
- 2) 共感覚というのは人間の知覚面での特徴であり, 当然人間の文化的というよりは生物的存在としての共通性が強く現われてくるのであろうから, その意味で異なる言語間に共通の共感覚的表現が出て来たり, どの

- 感覚からその感覚に転用されるかという点に関して共通の傾向が認められたりしたとしても、特に不思議ではないわけである(池上 1978:142)。
- 3) 「カン」と読み「塩辛さ」のことを表す。
 - 4) 本論において「本義」とは、語の中核的意味のことを指し、「原義」、すなわち語の語源的意味とは区別して使用する。
 - 5) 意味成分は、SUGARYのように英語で記述し、スモール・キャピタルで表記する。
 - 6) 語源的には、日本語の「アマイ」は「ウマイ」と関係が深い可能性があるが、確証はない(城生 1994:66, 城生・佐久間 1996:183)。また、英語のsweetは、古英語swete まで遡れば、“pleasing to the senses, mind or feelings” (Online Etymology Dictionary: <http://www.etymonline.com/>) のように、本来は「心地よい感覚」を表していたらしい。
 - 7) 日本語の「アマイ」のDELICIOUSという意味成分は、「甘い(うまい)汁を吸う」「甘いものに蟻がつく」という比喩表現に見られるように、「利益のある」「儲かる」という意味とも結びつくことがある。
 - 8) 共感覚表現の転用には「触覚」のように原始的な感覚から「視覚」「聴覚」のような高次の感覚へ転用する傾向があり、その逆はありえない、という説があり、これがいわゆる「一方向仮説」(Ullmann 1951, Williams 1976, 池上 1978, Viberg 1983, 楠見 1988, 山梨 1988)といわれるものであり、これに対抗して、共感覚表現の転用は必ずしも一方通行的なものではないという「アンチ一方向仮説」(森 1995, 瀬戸 2002)もある。
 - 9) 英語にその傾向性が強いようであるが、「味覚」から「触覚」への共感覚表現の転用は日英語を通じてさほど多くないように思われる。白輪・坂本(2003)では、Web上で実際に使われている表現をデータベースとして、共感覚表現の個数を算出しているが、「味覚」から「触覚」への転義は、全187,066例のうち1,140例しかなく、全体の1%以下である。
 - 10) この日本語の表現に相当する英語の表現に“sweet nothings=romantic and loving talk” というのがあるが、まさに「甘い(恋と愛の)囁き」という感じで用いられる。
 - 11) 英語の“~be sweet on...”を「~は...に甘い」と日本語に直訳しても、英語のBE-IN-LOVE-WITHというニュアンスはほとんど出ない。
 - 12) ただし、“You'll have a sweet time persuading him.”「彼を説き伏せるのに楽しいひと時を過ごすことになるでしょう」のような反語表現では、ENJOYABLEという意味成分もSEVEREと解釈せざるを得なくなる。
 - 13) 日本語の場合は、NOT SALTYとはいっても、全く塩分を含まない、という意味ではなく、これに対して、英語の場合は、全く塩分を含まない、というニュアンスが強い。
 - 14) Backhouse (1994:155)によれば、日本語の「アマイ」は、その意味の展開において、(a) sweet smellsおよび(b) tastes lacking pungencyの二系列に分かれ、英語の“sweet”にはない「好ましくない性質」への方向への意味の展開が見られる：A notable feature of these extensions is that AMAI here denotes evaluatively neutral or, in many cases, unfavourable qualities, in contrast with its positive status in the basic field, and in this respect it behaves quite differently from English SWEET. (Backhouse 1994:156)

【参考文献】

- Backhouse, A.E.(1994) *The lexical field of taste: A semantic study of Japanese taste terms*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 飛田良文・浅田秀子(1991)『現代形容詞用法辞典』東京堂出版
- 池上嘉彦(1978)『意味の世界 現代言語学から視る』日本放送出版協会
- 城生伯太郎(1994)『日本語研究所』日本実業出版社
- 城生伯太郎・佐久間まゆみ(1996)『日本語小辞典』東京書籍株式会社

- 国広哲弥(1989)「五感をあらわす語彙－共感覚比喩的体系」『言語』18;11: 28-31.
- 楠見孝(1988)「共感覚に基づく形容表現の理解過程について－感覚形容語の通様相的修飾－」『心理学研究』58;6: 373-380.
- 森敏昭(1995)『グラフィック認知心理学』サイエンス社
- 瀬戸賢一(2002)「共感覚表現：一方向性の仮説を反証する」『日本英語学会第20回大会予稿集』pp. 37-40.
- 白輪祐也・坂本真樹(2003)「共感覚表現のデータベース作成とそれに基づく一方向性仮説再考」『日本言語学会第126回予稿集』pp. 30-35.
- Trask, R.L. (1997) *A student's dictionary of language and linguistics*. London: Arnold.
- Ullmann, S. (1951) *The principle of semantics*. London: Basil Blackwell.
- Viberg, A. (1983) "The verbs of perception: A typological study," *Linguistics* 21: 123-162.
- Williams, J. M. (1976) "Synaesthetic adjectives: A possible law of semantic change," *Language* 52;2: 461-478.
- 山梨正明(1988)『比喩と理解』東京大学出版会